

* 要旨は資料作成者の主観によるものであり、執筆者の意図と一致しているかどうかは不明です。

1. 福永自身による言及など

No.	タイトル	著者	書名(出版社)	初出年/月	ページ数	要旨
0	「風のかたみ」初出と書誌	—	福永武彦全集(新潮社)第9巻 附録他より	—	1	・初出:「婦人乃友」昭和41(1966)年1月号より昭和42年(1967)12月号まで連載(24回)。 ・単行 1 「風のかたみ」初版。昭和43年(1968)6月新潮社刊。四六判、紙装、函入。函装として田中親美による「三十六人家集」の料紙覆刻。岡本半三。本文241頁。題字著者。本文344頁。内容—「風のかたみ」1篇。 2 「風のかたみ」新潮社文庫版。昭和54年(1979)9月刊。カバー装画「守屋多々志。本文374頁。内容は上記1に同じ。及び「解説」(野口武彦)。
1	堀辰雄の作品	福永武彦	新潮社版「普及版『堀辰雄全集』」全6巻月報1958年5月—同年12月刊 「批評B」収録 福永武彦全集(新潮社)第16巻に所収	1958/05~12	38(全集)	(「曠野」についての文章からの引用) 「曠野」は昭和16年11月作で、「今昔物語」巻30第4に拠った王朝小説である。(中略)彼が王朝小説を書くのは、芥川龍之介が試みたように近代人として古代を分析し解釈するのではなく、釈迦空の謂わゆる「堀君は心虚しうして書く人」であったから、自分を古代人そのものの立場に置いて、感受したところを描き出すのである。勿論彼は雰囲気をつくるためにクローデルの作品やルイズ・ラベの詩を読むが、それはこの王朝小説に於ける一種の間接照明の役割を果しているだけで、決してハイカラといったものではない。何処からともなく漂う微光の中に、運命の大きな包容に身を任せて諦念に充ちた微笑を浮かべている女主人公の面影は、堀の方法がもはや彫琢の痕をとどめていないだけに、最も美しい。
2	『今昔物語』の世界	福永武彦	筑摩書房版「古典日本文学全集10 今昔物語集」1960年1月刊 「批評B」収録 福永武彦全集(新潮社)第17巻に所収	1959/11	13(全集)	『今昔』は我が国の古典のうち比較的不遇な待遇を受けて来た。(中略)しかし『今昔』を藝術作品として捉えようとする努力は、この岩波版を契機として更にいっそう活発にならなければならない。それも短篇小説、即ちコントとして、『今昔』の中に佳篇があるとかないとかということが問題なのではなく、この龐大な作品全体に一つの文学性を見出す仕事である。(中略) 『今昔』を覆うものは決して単なる無常感ではない。宿業を懼れるあまり生活に萎縮することではない。作者がそのジャーナリスティックな才能を用いて蒐集した世俗の伝承は、どんなに佛教の教義に反するものでも構わない。ここには無数の残酷物語がある。幽鬼や悪霊や狐狸に関する話も、陰陽術や外術のような異端に関する話も収められている。つまりここには人間のあらゆる流転する相が示されるが、それはすべて佛教と、いずれは何処かで交じり合うものとする者は信じて疑わない。作者は直接的な効果を狙って仏教普及の書物を書くのではなく、「佛法」と「世俗」との二つの面から、一つの龐大な佛教的世界を描き出そうと目論むのである。(引用)
3	古典としての「今昔物語」	福永武彦	「東京新聞」1967年6月8日朝刊 福永武彦全集(新潮社)第9巻に所収	1967/06	2(全集)	今昔の面白さは、短い物語が、短いなりに独立して、その一つづつは確かに必要にして充分なだけ書き込まれてはいるものの、前後に空白を持っている点である。或る事件に際しての一人の人物の行動が描かれていても、その人物の前身も分らなければ、なり果てた末も分らない。端役の人物にいたっては、光の当たっている場面以外は茫洋たるものである。従って読者の方にしてみれば、すらすら読めば読むで千変万化の面白さはあるが、立ち止れば立ち止ったで、そこにこちらの想像力が刺戟される。ひょっとしてこの男は、前に出ていた男の変装ではあるまいか、などと考える。さながら「今昔物語」の全体が、無数の登場人物の出る長篇小説を、順序不同にこまぎれにして並べたのではないかと疑いたくなる。(しかし、実際は一定の原理に従って排列されているのであろう。私は前にそれについて短いエッセイを書いた。)そういう見地から見れば、今昔は芥川龍之介などの試みたように、短篇小説の材料として貴重でだけはあるまい。あれこれの話を上手に繋ぎ合せると、長篇小説の材料としてもふさわしいものであろう。という目論見の上に立って、私は昨年か或る雑誌に長篇を書いているが、実際にやってみるとちっともまうまい。(引用)
4	私訳『今昔』縁起	福永武彦	河出書房新社版「日本文学全集第6巻 王朝物語集(二)」1968年11月刊 「批評B」収録 福永武彦全集(新潮社)第17巻に所収	1968/02	3(全集)	おびたしい人間群像は、なるほど背後に、佛法というものを最高理念として持っているのかもしれないが、運命にあざわれながら、舞台の上を、盲同然に、往ったり来たりするだけだ。著者の眼はしばしば無神論者であり、何ものをも信ぜず、ただこの憐れな人間という生き物を見守っている。そこから万華鏡のように、さまざまな運命、嗟うべき運命が、展開する。芥川龍之介をはじめ実に多くの文学者が、この書物に夢中になり、その数多い挿話を小説の材料にしたのも、実に宣なるかなと言える。白状すれば、僕もまたサナトリウムで日夜この書物を愛読していた頃、興にまかせてノートを取り、いずれは、『今昔』の舞台を舞台とした、大長篇を書きたいものと思っていた。しかし芥川の才をもってしても、『窃盗』ほどの長さのものしか書けなかったのだから、めったな野心を起して、病を悪くしてもつまらないと考え直し、途中で計画を中止してしまった。(引用)

5	福永武彦全小説 第9巻 序	福永武彦	福永武彦全小説 第9巻 福永武彦全集 (新潮社) 第9巻に所収	1974/05	3 (全集)	芥川の歴史小説は、王朝物を含めて、過去の人物が現代人の心を持っている点に特徴がある。それは芥川が歴史的人物を彼の物指でいちいち計ったとまでは言わないとしても、彼の描写する人物たちには、現代人がタイムトンネルを抜けて過去の舞台に連れて行かれたようなところが見られるためである。従って芥川の王朝物には、何となくハイカラな感じを伴う。「歴史そのまま」ではなく「歴史離れ」である。 私は少年時に芥川の「偷盗」や「地獄変」を愛読し、戦後サナトリウムにいて国史大系本で「今昔物語」を耽読した頃から、自分でも王朝物を試みたいと願っていたが、「婦人乃友」から連載小説を求められた機会にそれを実現しようと考えた。但し芥川流にはない。そこは根本的に違っている。 私はさして古典に明るいとは言えない。「古事記」を訳し「今昔物語」を訳したのは謂わば偶然であり、出版社のそそのかしに乗った結果にすぎない。そしてこれらの現代語訳を試みた末に私が得たものは、私たち現代人の心を以て古代人の心を推し量ることは出来ないという認識である。もともと私は自分の小説の主題に、常に、人は他人の心を知ることが出来ないという大前提を置いているが、現代に於てさえそうなら時を隔てて古代人の心が分る筈がない。彼等は彼等なりに、自然に、現代の我々とは無関係に、生きている。彼等がなぜそうするのか、私はそこに合理的な解釈を施そうとは思わない。私はただその時代（ここでは王朝だが）でなければ生きていられない人物を舞台で動かせば足りるのである。もし彼等が私のペンによって生き生きと見えるならば、彼等が呼吸している時代の空気も再現できるだろう、というのが私の考えだった。果してこの「風のかたみ」が、私の意図したように出来上ったかどうかは私には分らない。ただ大伴の次郎にしても菟姫にしても楓にしても、「海市」の恋人たちとはまったく違った考え方や行動力を持ち、そこに作者が「海市」と平行してこれを書いた意味があるだろうと思う。 この巻の紙数があまったので、附録として私が嘗て試みた「今昔物語」の現代語訳のうち、「風のかたみ」の素材になった、或いは素材に近い部分を選んで、十九篇ほど収めることにした。もともと素材と言ってもヒント程度のもものが多くて、そっくりそのまま使っているわけではない。(引用)
6	詩と小説と映画と	福永武彦	「古典と現代」39号 明治書院 1977年7月号 長谷川泉との対談 「小説の楽しみ 福永武彦対談集」(1981)所収	1977/07	19 対談集	(福永の発言からの引用) その人のもって生まれたリズムというものがあると思うんです。ほくの場合、そういうリズムは明らかに「今昔物語」「平家物語」系統の男性的文脈なんです。王朝の物語の、ああいふ女性的な文章というのはどうも苦手ですね。(中略) 「今昔物語」を読んだのは清瀬村の療養所に居るときですから、これは戦後です。なかなか全部読むのは大変で、病気でもしないと読めませんからね。そのとき、また、フォークナーとヘミングウェイをどちらもポータブル双書で読んだんです。 フォークナーとヘミングウェイとはまったく対照的で、フォークナーは大変男性的ですが、文脈としては女性的な、息の長い、ゆるやかな文脈です。それからヘミングウェイはご存知のように、大変短いわけですから。そこで、「今昔物語」とヘミングウェイとは大変似ているというのがぼくの印象なんですけど、それはやさしいですよ。意識しないで書けるという感じです。そこにはもちろん鷗外も入って来ます。鷗外のような、わりに短い文章なら書きやすいということですよ。

2 文芸関連雑誌

No.	タイトル	著者	資料	初出年/月	ページ数	要旨
1	福永武彦と説話	竹西寛子	国文学 1972年11月号 特集 福永武彦	1972/11	3	芥川龍之介や堀辰雄が行ったようにではなく、またそれらの単なる量的追加でもなく、多くの今昔説話を自由に分解し、他の素材とともに、氏自身の主題で再構成するといったような方法が採られたのは、今昔説話のおもしろさの普遍性を今の世に思う一方で、語り、聴き、読みながらの知識や喜怒哀楽の共有が可能であった時代の、その創作と享受の関係に、現代作家として立ちかえり汲むべきものが切実に思われていたということのひとつのあらわれではないかと考えるのである。(引用)
2	堀辰雄と福永武彦 古典とのかかわり	佐藤泰正	国文学 1974年2月号 憧憬の美学 堀辰雄と福永武彦	1974/02	6	男女の悲恋を軸とし、群盗の首領じつは検非違使の長という推理小説風の趣向なども凝らし、一編の良質の娯楽小説を、とは作者本来の意図でもあろう。(中略) 「今昔物語」の世界に面峙して、芥川はそこに映し出されてゆく己れの命運の影をあざやかに読みとり、堀辰雄はまた二極相関のただなかに刻み出されてゆく、この風土のきびしい体感をみずからのものとした。福永武彦にあってかかる古典との面峙対決の— その内実とは、むしろ「今昔物語」ならぬ、「忘却の河」その他に見る土俗の影への、深い凝視のただなかにこそ生きたといふべきであろうか。(引用)
3	福永武彦 -その作品 「風のかたみ」	栗坪良樹	国文学 1974年2月号 憧憬の美学 堀辰雄と福永武彦	1974/02	3	この小説に登場する主人公たちは、いずれも失恋の寂寞ののうちにいて、そして死んでいく運命を担ったものばかりである。その点では、個人の差は、作者の＜美感＞によってすべてひとしなみに貫かれてしまっている。そこが、この小説の特異性とも言えるし、福永文学の特色とも言えよう。ここでは、「王朝」という時代性は、一つの意匠以上の役割を果たしているとはいいがたい。と言うよりも、ここに描かれた恋の綾は、作者の人間を操る綾の反映なのであって、時代性とは関わりがないということなのである。(中略) この天の眼のごとき、またこの世を幻化する妖怪のごとき、この「法師」とは一体何者であろうか。じつはこの存在には作者自身が仮託されていて、作者が見はらした沃野には、恋の綾も人間の連関も意外にも吹きはらわれて、寒々とした「秋の風」だけが行き過ぎていたということになっているのだ。(引用)

4	編年体 評伝福永武彦 1966～1967年	源高根	国文学 1980年7月 福永武彦へのオマージュ	1980/07	1	芥川龍之介の王朝物が、材料である「今昔物語」に対する短篇的解釈と利用であったのに較べれば、福永武彦の「今昔物語」への理解は、常にあの「膨大な作品全体に一つの文学性を見出す」（『今昔物語の世界』）という態度にあった。「風のかたみ」の波瀾万丈の物語的な面白さは、すでにそこから生じている。しかも、「風のかたみ」に芥川の王朝物以上の現代性が感じられるとすれば、それは「人は他人の心を知ることが出来ない」（『全小説第9巻 序』）という福永武彦の全小説に通じる根本的な認識によるものだと私は考える。（引用）
---	--------------------------	-----	----------------------------	---------	---	----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

3. 新聞、文庫/全集 解説他

No.	タイトル	著者	資料	初出年/月	ページ数	要旨
1	文壇クローズアップ	平野謙	小説新潮 1968年9月	1968/09		無論、そのおもしろさは上乘のエンターテインメントを読むおもしろさといってもいい。歴史小説あるいは王朝小説の仮面をかぶってはいるものの、この長篇の実質はスレチガイ小説プラス推理小説のおもしろさにある、といってもいい。（引用） （注）平野氏は、1968年「ことしの読売小説ベスト3」に『風のかたみ』を選出している。
2	新潮文庫版 風のかたみ 解説	野口武彦	新潮文庫版 風のかたみ 1979年9月初版	1979/08	6	『風のかたみ』は、悲劇的破局に方向づけられた王朝風の教養小説である。中略）藤原定家の『拾遺愚草』に、恋の歌とて、「跡もなき波行くふねにあらねども風をしるべにもの思ふころ」。この物語の結末で菫姫尼が口ずさむ一首は、その下の句を「風ぞむかしのかたみなりける」と読みかえている。愛と孤独。この後者に重きが置かれることで、一首の調性はまったく変わってしまう。そしてそれはまた、『風のかたみ』一編の主題の調性でもあったのである。（引用）

4. 大学研究紀要、その他研究録

No.	タイトル	著者	資料	初出年/月	ページ数	要旨
1	福永武彦研究 「風のかたみ」を中心に	大隅素実	二松学舎大学 人文論叢第20巻	1981/10	9	筆者は、「風のかたみ」に源氏物語の雰囲気を強く感じ、その要因を「風のかたみ」が、源氏物語を母胎として、そこに今昔物語の説話をはめ込んでいったためではないかと考える。意識的なものではなかったかもしれないが、それならばなおさらのこと、古典は福永の中に生きていることになる。「風のかたみ」と源氏物語との類似点として以下を挙げている。 永遠の女性：光源氏は、桐壺更衣（母）→藤壺女御（義母）→紫上（義母の姪 妻）を永遠の女性として求めた。次郎もまた、永遠の女性として、生母→叔母→従妹 を求めた。 予言の提示と成就：物語の最初に次郎の運命を予言した法師、智円の言葉と、光源氏への高麗人の予言。 愛の無常：源氏物語は、愛と死という根本的命題をかかっている。（要約）
2	福永武彦の文学的想像力 『風のかたみ』について	門田佳子	帝塚山学院大学 日本文学研究第24巻	1993/02	11	『今昔』と『風のかたみ』はテキストとプレテキストの関係にあり、元にあるテキストに福永がどういった手を加えたかを、「笛の機能」「宗康という人物」「手紙の機能」について検討している。 「笛の機能」では、姫の心を変え得た笛を持ちながら、次郎が自分の繊細な欲求によって、悲劇に陥ってしまうこと、「宗康という人物」では、宗康の矛盾を持った執着が、宗康をいかにも『今昔物語』的人物とするための人物造型の手段の一つであること、「手紙の機能」では、「王朝もの」が持たざるを得ない制限を、福永が「だまし機構」を使った「手紙の物的側面の利用」によって、構成上の魅力としてしまっている点について述べている。そして、これらの技術、福永の文学的想像力が、『風のかたみ』を『今昔』を素材とした殆ど唯一の長篇小説として成功させている。（要約）
3	『風のかたみ』と「アーサー王と其の騎士たち」	倉持丘	福永武彦研究第3号	1998/01	5	福永は、開成中学4年生のときに「アーサー王物語」を翻訳し、校友会雑誌に掲載している。本論では福永が少年時代に愛好したアーサー王の物語への興味が、同じ超自然的な世界が描かれている『風のかたみ』につながっているという仮定のもとに、両作品の関係を探り、それにより『風のかたみ』の特質の一部を明らかにしようとしている。 両作品の類似点として①菫姫—次郎の関係と、王妃ギニアビー—騎士ランスロットの関係 ②次郎を愛する楓と、ランスロットを愛するエレーン ③陰陽師智円と、魔法使いマーリン を主に論じている。 『風のかたみ』には『今昔物語』の説話の世界とは別にロマンの世界があり、それを支えるものは『アーサー王』の世界であろう。福永自身ももう意識しなくなっていたかも知れぬが、中学4年生で訳した「アーサー王と其の騎士」は、感覚的基礎として福永の無意識の世界に隠れており、それが『風のかたみ』の執筆のとき、顕在化してきたのである。（要約）
4	『風のかたみ』再考 一業と共に消える美女	高野泰宏	福永武彦研究第5号	2000/06	8	筆者は、菫姫の二面性を、属性A：「飛び抜けて美しい」ことに起因する色欲を誘発する属性 属性B：優しい性格に起因する属性に分け、物語の構造分析を行っている。さらに最終章の「いさら川」は、菫姫の二つの属性が統合される場面であるとし、本作品には非常に重い主題—「業」に対する「罰」とその甘受—が含まれており、恋愛不成立の不条理より遥かに厳しい世界が描かれているとしている。（要約）

5	『風のかたみ』論 — その愛の形について—	倉西聡	武庫川国文第58号	2001/09	8	<p>本稿では福永の処女長篇である『風土』を念頭において、この作品を考察している。以下は本稿からの引用。</p> <p>「生きた骸」ではなく「姫の心」を求め、それが得られなければ「生きようという心持を失って」しまうという次郎の心の在り方は、ただただ芳枝の愛を求め続け、ついにそれを得た時の『風土』の主人公桂の絶望とぴったりと重なるように思われるのである。(中略)つまり次郎という人物は王朝物の主人公として、剣と笛の名手として作中に活躍するという役割だけではなく、現代における愛の形を追求した『風土』の人物の後継者としての役割も担わされていたのである。(中略)</p> <p>福永武彦は『風のかたみ』を構想するにあたって、かつて『風土』で描いた愛の形を批判的に発展させる意図を抱いたのだと思われる。しかし実際に作品を展開するにあたって、作品の完成度を重視してその意図を曲げたのではないだろうか。次郎も楓も安麻呂も死んでしまった後、最終章の「いさら川」では世を捨てて尼になった萩姫が、死者たちの冥福を祈るといふ悲劇的な構図の中に、この作品のイメージが定着することを、福永は最終的には望んだのである。</p>
6	『風のかたみ』の成立基盤 — 「姫君」造形に窺える喪失感の傷み	稲垣裕子	福永武彦研究第7号	2003/04	16	<p>筆者は、「風のかたみ」の成立過程を考証しつつ、芥川「六の宮の姫君」、堀「曠野」の二作品との比較を通して、芥川と堀への意識が福永に与えた影響と、その影響下で造形された「萩姫」の独自性を考察している。以下は、「おわりに」からの引用。</p> <p>「風のかたみ」はこの二作品が想起され、これらと比較されることによって、その独自性を新たに発揮する。それを検討する手掛かりとして注目されるのは、いずれの作品にも共通する題材として『今昔物語集』の巻19「六宮姫君夫出家語第五」が意識されていた点である。とりわけ各作品の主要人物である三人の「姫君」造形に焦点を当てることは、彼らの影響関係を考察する上でも重要であり、「風のかたみ」に見られる独自の生と自我意識を新たに浮上させる。</p> <p>また福永作品に於いて、喪失感によって傷つき、「孤独」に苛まれる主人公が描かれることは非常に多い。福永は常にその傷を主人公に意識させ、語り手としてそれに寄り添って行く。しかし、福永が「孤独」と言う時、そこには「単なる消極的な、非活動的な、内に鎖ざされた」という負の意味はない。福永にとって「孤独」とは、己を強くする克己であり、「恐れることなく自己の傷痕を眺められるようになること」を課すものだからである。</p> <p>以上から「風のかたみ」は、この独特の「孤独」観によって、芥川や堀からの影響に基づく王朝物作品として見るだけではなく、福永の総作品に渡る<喪失感の傷み>という主題の延長線上にある作品の一つとして、位置付けることが可能だろう。</p>
7	「風のかたみ」論 — 「姫君」像を越えて	稲垣裕子	百舌鳥国文 第20巻	2009/03	18	<p>筆者は、前稿の論点を踏まえ、福永が昭和25年夏～26年7月頃にかけて構想していたとされる未完の短篇「野風」(『未刊行著作集19 福永武彦』に収録 2002年)と「風のかたみ」との関連、また、貴族社会の規制外に生きる娘、楓の存在意義について検討を加えている。以下は本論考からの引用。</p> <p>「野風」では次郎から姫へという単純であった恋慕が、「風のかたみ」においては萩姫をめぐる複雑に絡み合うこととなる。結果として「野風」は、福永が「風のかたみ」を執筆する際、芥川や堀が採った短編という形式から、長編へと構想を転換させるための草案となり、王朝物語的世界の範囲にとどまらない人物像を創造するきっかけとなったのではないだろうか。</p> <p>類型に陥りやすい衰弱した「姫君」像の呪縛を切り抜けるために、長編を構想した福永は「萩姫」の属する貴族社会とは生活空間の異なる「町屋の娘」「楓」を、単一化されない女性像として登場させる。つまり芥川から堀へと繋がる衰弱する「姫君」の物語には、逆説的に捉えれば「愛」の必要性が語られているのだ。共同体内の役割を意識せずともよく「娘」そのものである「楓」の「愛」は、貴族社会に制約される王朝物語的世界ではなく、『今昔物語集』的な広がりをもつ、町人のしたたかさや逞しさを備え、次郎の「愛」を引き出すのである。さらに「楓」は衰弱する姫君像の型から「萩姫」を越境させる存在でもある。</p>

5. 過去の福永研究会例会での発表 検討

No.	タイトル	発表者	資料	初出年/月	ページ数	要旨
1	『風のかたみ』と『今昔物語集』、或いは作中の和歌との関連について	佐藤武	第70回例会(2002.10.27)	2002/02		<p>今回の研究に当り、私は福永武彦の現代語訳『今昔物語』を読み直してみた。『福永武彦全集』第9巻の末尾には、その中から『風のかたみ』にヒント程度に使ったと作者自身が言う十九の話が収められているが、それ以外の話の中にも、若干ではあるが『風のかたみ』の中の地名、人名等に参考になったと思われる話が発見出来たことは収穫だった。</p> <p>また、『風のかたみ』の作中には和歌が十首あり、その内二首は『万葉集』『古今和歌集』からの引用だが、残る八首が福永の自作かどうかを確認する為に、上代・中古・中世の和歌を調査した。その結果、この八首は現存の和歌集には無い事が判明した。従って福永の自作であることは間違いない。</p> <p>これらの歌は『万葉集』等の和歌を参考にして、本歌取りの手法で詠んだものである。福永の唯一の歌集『夢百首』にはこの八首は収められていないが、その理由はここにあるのだろう。なお、「本歌取り」とは旺文社の古語辞典によると、「意識的に昔の歌を手本にして作歌すること。背後にある古歌と二重写しになって、余情を深める効果がある。余韻、余情をたつとぶ新古今の時代に特に重んじられた表現技巧である」とあり、『風のかたみ』に即してここに具体例を一首挙げると</p> <p style="text-align: center;">(本歌) 待つらむと契りしほどを忘れずば誰かながめて日を暮すらむ (藤原定家『拾遺愚草』) (福永武彦作) 待つらむと契りしほどを忘れずば身の朽ちぬまの逢うこともがな (『風のかたみ』では菘姫の作ということになっている)</p> <p>ということになる。調査の結果、上三句が全く同じ歌が上に引いた歌の他に二首発見し、他の五首についても作歌の参考になったと思われる本歌を見つけることが出来た。いずれも意味の分かりやすい作り方で、声に出して詠みたいほど粒揃いの歌である。</p> <p>福永には『今昔物語』の他にも『古事記』や『日本書紀』『御伽草紙』等の現代語訳があり、古典に対する造詣の深さはかねてから知ってはいたが、今回の調査を通じてそのことが改めて分かった次第である。</p> <p>(コメント)</p> <p>(所感1) 今回の佐藤武氏の発表は、周到に準備された資料と、自らの作歌体験に裏打ちされた、実に興味深いものであった。全体の「あらすじ」を確認した後、『風のかたみ』中の短歌10首が、自作の『夢百首 雑百首』に未収録の点に着目し、作中で出典が明らかにされている2首以外の8首も、実は『万葉集』や『古今集』、わけでも定家の『拾遺愚草』からの、見事な「本歌取り」であることを具体的に指摘された。これらの歌の比較検討の精しい資料は、佐藤氏の長期に渡る準備を物語り、また、第10首目の歌(「跡もなき〜」)についての解釈には、氏の作歌経験が反映しており、充分納得のいく、見事なものであった。さらに、この『風のかたみ』が、どの程度『今昔物語』を下敷きにしているかを、福永自身が明らかにしていない巻までも調査し、比較された点が注目される。</p> <p>(所感2) 日本文学の研究は「訓古学」と言う学問に其の一つの源流があります。『万葉集』や『古事記』、或は『古今集』や『源氏物語』などの「古典」を「訓ずる」ところから出て居るのです。其の学問は、時間をかけて多くの書物を繙き、記憶し、其の中で関連性を見出し注釈をつけていくのです。最近の文学理論の研究ではそういう方法ははやらないのかも知れませんが、其の成果は誰も否定することは出来ません。そして今回の佐藤さんの、半年かけて準備したと云う此の発表は、そういう伝統が脈々と息づき、福永文学に対してとさえも有効な方法であることを実証したように思われました。</p> <p>『風のかたみ』という、一種通俗的に見えるもので、而も「王朝もの」に分類される福永文学としては珍しい作品は、其の特殊な性格故に福永文学の系譜から外れたものとして扱われている嫌いがなくもなく、研究もさして盛んではないようです。しかし、丹念な調査を基にすれば新しい可能性が開けてくるのだろうと云う展望が今回示されたような気がします。</p>